



# 『展覧会の絵』色 いろいろ

川上 央 (日本大学芸術学部次長・音楽学科教授)

Text by Hiroshi Kawakami

名曲のなかには様々な編曲があるものが多い。名曲とは時代を超えて、多くの人に愛され、その時代の様式に合わせて姿を変え、次の時代へと受け継がれていく。このことは音楽に限ったことではなく、文学作品が映画やアニメにと時代に合った姿に変えていったり、和食がフランス料理のように姿を変えたりと、人に愛されるものは必ず姿を変え、永続的に我々を楽しませてくれる。今回のプログラムの『展覧会の絵』もまた、世界的に愛されている名曲であり、多くの音楽家が調理法を変えて発表してきた曲である。

楽曲のタイトルのように、この作品は美術館巡りのような標題となっているが、ムソルグスキーの友人、建築家で画家のヴィクトル・ハルトマンへのオマージュとして作曲されたものとされている。ハルトマンは39歳で夭折したが、

他界する3年前からロシアの芸術家仲間のサークルで知り合い、意気投合する。ムソルグスキーにとってはまさに友情が深まってこれからという時の死であるため、その無念さは大きかったに違いない。ハルトマンの死の翌年、彼の作品を集めた遺作展が母校のペテルブルク美術アカデミーで開催されたが、この半年後に組曲『展覧会の絵』が完成された。絵を飾った遺作展は期間限定のものであるが、音楽作品としてハルトマンの偉業を後世に残すことに成功したムソルグスキーの彼への友情はとても深いものと感じる。

さて、私自身、絵画は大好きであるが、中でもゴッホの「ひまわり」がお気に入りである。小学校低学年の時に、はじめて「ひまわり」を見た時、その明るいオレンジ色に衝撃を受けた。

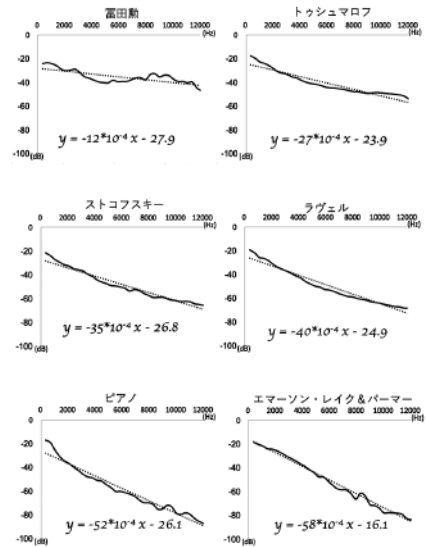
## 『展覧会の絵』色いろいろ

それ以後、イギリスやオランダなど、ひまわりのある美術館を訪れて思うことは、見る場所や時間、季節によって、色の印象が異なることである。もちろん、ゴッホのひまわりは世界で5点存在するので、違う作品は当然、色も違うのであるが、それよりも、心理的な鮮やかさの印象が全く異なることに気づいた。アムステルダムのゴッホ美術館で見た時は落ち着いた感じ、ロンドンでは鮮やかな感じと、色の印象そのものが違う。絵画は光によって見え方が変わるが、美術館の照明はある程度同じものである。

ではなぜ、色の感じが違って見えたかという、場所や時間によって、絵を見るまでの太陽の光や部屋の光が違うことによるのではないか。「ひまわり」を鑑賞するまでに、太陽の光につつまれて美術館を訪れ、展示室に入り、その時の明るさが基準となって作品を見ることになるため、印象が違って感じるのではないだろうか。オランダで見たひまわりは、夏のアムステルダムの明るい太陽を感じながら美術館に入ったため、きっと落ち着いた感じに見えたのだと思う。ロンドンでは霧の暗い日だったため、鮮やかに見えたに違いない。そのように考えると、今回の『展覧会の絵』では、プロムナードこそ、それぞれのタイトルの絵の色のイメージを支える、重要な要素となるのではないだろうか。そこで、この作品の様々な編曲版における、第1プロムナードの「色」について分析を行ってみた。

音色おんしよという音楽の要素があるが、これを音響学ではスペクトルと呼び、周波数の出力分布で表すことができる。光のプリズムと同じく、音を周波数ごとに分解して、高音域の成分が全体のどれくらいであるかなどを検討することができる。そこで、冒頭のプロムナードの部分に関して、今回演奏されるラヴェル編曲のオーケ

ストラ版を含む6つのバージョンで比較を行なってみた。モーリス・ラヴェル版以外には、リムスキー＝コルサコフが改訂を行ったオリジナルに近いピアノ版、指揮者のレオポルド・ストコフスキーによるオーケストラ編曲版、ロックバンドのエマーソン・レイク&パーマー (ELP) 版、シンセサイザーによる富田勲版、それと、1891年に初めてオーケストラに編曲されたミハエル・トゥシュマロフ版(リムスキー＝コルサコフ版)である。この編曲版の冒頭プロムナード全体をスペクトル解析し、周波数成分の近似直線を求めた。



このグラフであるが、曲線がプロムナード全体の周波数スペクトルのグラフで、点直線がその曲線の近似直線である。グラフは上段左から富田、トゥシュマロフ、中段左からストコフスキー、ラヴェル、下段左からピアノ、ELPの順である。グラフ下にそれぞれの編曲版の数式が書いてあるが、これは近似直線の一次式であ

## 『展覧会の絵』色 いろいろ

る。この一次式のxの前の数字(係数)が小さいほど、グラフの傾きが大きいことになる。グラフの周波数は右に行くほど高い周波数のため、高い周波数成分が少ない場合、つまり、右に行くほどグラフが下がるような場合、音響的には高域成分が少ない音色になる。音色は人によって感じ方が違うが、一般的に高域成分が少ないと、音がこもった感じや、暗い感じということになり、高域成分は鮮やかさや煌びやかさ、あるいは甲高さのような印象に関係する。近似直線の係数の $10^4$ の前の数字を見ると、富田の-12から、ELPの-58まで、だんだんと数が小さくなっていくことがわかる。この数字の順に、高い周波数成分の割合が少ない音響となり、鮮やかさで考えると低くなると考えられる。

富田版では、シンセサイザーの電子的な煌びやかな音色によって表現されているため、他と比べても圧倒的に高域成分が多い。ELPもバンド演奏のため、富田版と同じような傾向があるかと思うと、逆に最も低い値となっている。この理由は、 Hammondオルガンのみによって第1プロムナードを演奏しているため、比較的低音域の多い重厚な演奏であったことによる。ピアノ演奏は、この Hammondオルガンのひとつ上の値に位置するが、これはピアノが暗い音色ということではなく、ピアノ版も低音域を生かした重厚な和声となっていることと、オーケストラやシンセサイザーなどに比べれば、高音域の表現が少ないことが考えられる。またピアノは減衰振動する楽器なので、ヴァイオリンやトランペットのように高域成分を維持するのは物理的にも困難である。

次に、オーケストラ編曲版の3つについて検討してみると、トゥシュマロフ、ストコフスキー、ラヴェルの順に係数が下がっている。この3つの編曲版で異なるのは、プロムナード冒頭にお

いて、ラヴェル版はトランペットのソロであるが、ストコフスキー版は第1ヴァイオリンのユニゾンによって演奏されている。後半部分はどれも、弦楽器と管楽器による演奏となるが、この有名なメロディをトランペットのものにしたのはラヴェルである。トゥシュマロフとストコフスキー版は弦楽器中心で、ストコフスキー版は弦楽器と木管楽器を交互に組み合わせながら、金管楽器はアクセント的に使用している。このアクセントがストコフスキーならではの煌びやかなイメージとなり、ラヴェル版よりも高域の成分が多くなっていると考えられる。トゥシュマロフ版は後半、シンバルが拍ごとに鳴る部分があり、高域成分に大きく影響を与えている。

ラヴェル版は、煌びやかなトランペットのソロからスタートし、その後、トランペットソロと金管楽器の組み合わせによって金管アンサンブルのような音色としている。そして、そこに弦楽器や木管楽器が加わり、多彩な音色を構成していく。この編曲はラヴェルの色彩的なオーケストレーションの代表作とも言えるが、3つの編曲版の中でも最もピアノ版に近い値であることにも注目したい。ラヴェルは、この『展覧会の絵』をオーケストレーションによって色彩的に表現しつつも、ピアノ作品として作曲したムソルグスキーのオリジナルの色彩もちゃんと保たせていることをスペクトルが示唆している。

このように、プロムナードは展覧会の絵の色の基準を作る重要な部分である。10枚の絵の色の印象を決めるのは、それぞれのプロムナードであり、このプロムナードを演出することも美術館の重要な仕事である。今宵の美術館のキュレーターは飯森範親氏であるが、飯森氏がどのような色彩のプロムナードを作り出すかを楽しみにしながら、この展覧会場に入館していただきたい。